札幌学院大学
Sapporo Gakuin University

人文学部報

●人間科学科●英語英米文学科
●臨床心理学科●こども発達学科
●大学院臨床心理学研究科

2014・3・7　No. 35

編集発行/札幌学院大学人文学部広報委員会
〒069-8555 江別市文京台11番地 ☎011-386-8111㈹

人文学部 wwwトップ：http://jinbunweb.sgu.ac.jp/

2013度、人文学部は6名の新任教員をお迎えしました。そこで今回の巻頭エッセーでは、新任の児島恭子先生（人間科学科）と久藏孝幸先生（臨床心理学科）に、ご自身の研究内容の紹介文をお寄せ頂きました。

文化の多様性と人間を知る学問へのいざない

人間科学科 教授　児島　恭子

はじめて飛行機に乗ったのは大学1年生の時、夜の羽田空港からコペンハーゲンに向かいました。1ドル360円の時代です。旅行中、海の向こうでは家族が日本の日常を暮らしていることが不思議な感覚でした。なぜそんな話から始まるかというと、大学生時代はさまざまな出来事の経験や人との出会いにあふれていると言いたいからです。2013年4月1日に本学に赴任して、教職員の方々に助けられながら仕事をしていますが、学生たちの世界が狭いように感じます。身の回りの環境で楽しむことに満足して、変化や冒険に臆病であってはもったいない。「青春」は個々の気分で取り戻せるのに対し、「学生時代」は、社会的に保証された幸福な時代というちがいがあります。周りの大人が背中を押してあげる必要があるのかもしれません。

さて、私は古代史が好きだったので、卒業論文は中国の『宋書』に書かれた5世紀の「倭の五王」の文献的考察でした。修士論文は8世紀の戸籍に載っている人名の分析から、律令の父系的な家族秩序とは異なる家族の実態を明らかにしようとしたものでした。じつは古代史への関心は日本文化の起源の探究への興味から来ていました。しかしそのテーマは視野が広すぎるし、碩学が博識を駆使して組み立てる壮大な仮説という性格のものでした。現実にはゼミで着実な論文になる勉強をせざるをえません。先生や先輩たちに導かれて古代史から中世の荘園や武士などについても勉強し、鍛えられました。同時に、大学でアイヌ語の勉強をすることができて、“日本文化の起源”のほうと二足のわらじ。70年代後半から80年代には、東京で北方研究のエッセンスに触れることができていました。アイヌ語地名やサハリン、シベリアの文化、南方との比較などの視野も広がったのは多くのすぐれた方々との出会いの御蔭です。しかしいろいろな面でむずかしい。では、私にできて私にしかできない研究はどういうものか。それで、日本史・東洋史の文献を基礎にし、アイヌ語によってアイヌの文化を理解することを通じて、総合的なアイヌ史研究を構築するという目標に絞って、博士論文はアイヌ史となりました。しかしまだ1歩が踏み出せただけです。民族学と考古学の成果を合わせて総合的というのです。アイヌについては古くから研究がされ、興味ももたれてきましたが、誤解もあります。問題の一つは、アイヌの歴史や文化を理解するのにアイヌ語の知識なしに行われたことで、その弊害は、日本語や日本文化を知らないでする日本史研究を想像すればわかることです。

児島先生の著書の一冊

学生時代にアイヌ語の口承文芸を採録させてもらうために会ったおばあさんたちがいました。日本の北海道で彼女たちが異言語であるアイヌ語を話しているという現実と、それを聞く若い和人学生（私のこと）に対する彼女たちの遠慮がちな態度は、やはり不思議な感覚でした。いうまでもなく、歴史がそういう空気をつくりだしたので、その感覚が、アイヌの口承の物語をアイヌの歴史として考えることを続けていますが、私がそうする原点なのだと思います。知らないことは選択肢にならないし、想像や創造の糧にもなりえません。

近年、巨木、とくにイチョウの巨木を調べています。その心は、イチョウは中国から人間が日本に持ち込んで人里に植え、数百年から千年、伐らなかったという歴史の探究にあります。歴史を学ぶことは人間とは何かを学ぶことであり自分を知ることであり、洞察力を磨く営みです。科学技術の発展も、原発問題に見られるように人間の価値観が問題になるのですから、人間科学（科）って、なんと重要なのでしょう。責任を感じます。日本史やアイヌ史関係の科目を担当し2014年度からの専門ゼミでも歴史と文化をテーマにしますが、それらを学ぶ意味がどこにあるかは前述のとおりです。

大学生は大学生になるらしい

臨床心理学科 准教授　久藏　孝幸

昨年春に本学に採用になったばかりでよくわからないのをいいことに、教育にも自由に取り組んでいます。たとえば後期の一年生向きの心理学研究法 A の中では、授業の中でミニ研究をしてみました。研究が実際に進む様子をライブで伝えられると研究法の授業としてはおもしろいと考えたわけです。

私が前任の大学で学生相談のカウンセラーの仕事もしていたのもあり、大学生が入学してから大学に溶け込み成長をする過程を知ることをテーマにしました。入学して半年たって良かったと感じることを尋ねたら、彼らがなにを体験して育つのかがわかるかなと思ってみたのです。ということで、9 月の最初の授業で百人の受講者に大学生活の喜びを自由に書いてもらいました。その結果の一部を、大づかみではありますが、この場を借りてお見せしようかなと思います。

図 1 は「大学生活をはじめて良かったことはなんですか」という質問への回答を、全員分をまとめて、試みに図示化した物です。もちろんいきなりこの図ができあがるのではなくて、この図を作る前段階では、自由記述の回答が人数分あります。

それらを一つ一つ読むと、ずいぶん多くの方が「自由が増えた」「一人暮らしができた」ということを喜んでいました。さらには「自分で決めることが増えた」「友達ができた」ことを書く人も多く、加えて「サークルに入って楽しいことが増えた」「好きなことを好きなように勉強ができる」「一人暮らしをして自分が成長したと感じる」などと書かれる方もいました。

図 1 では、意味の似通った回答を手作業でカテゴリに分類して、そのカテゴリの名を四角の中に書いています。そしていささか仮説的ですが、左側を始点として、良かったことの過程を矢印で二つの方向に示してみました。新入生が大学生活を喜べるようになる二つの過程です。

その一つは、新入生は「自由が増えた」その自由を「自己決定」の機会とし、自己判断で新しい活動や新しい勉強に使っているようでした。図では「自由が増えた」→「自己決定」→「新しい活動」&「知的欲求が満たされる」の経路です。大学生になり、高校生の頃に比べるとずっと時間的にも空間的にも自由でいることを体験し、おそらく 4 月にはいくつもサークルの様子や地域活動の場を試しに見に行ってみる等の「試行錯誤の効果」がこの経路にはあるのだろうと、そう名付けて図では点線で囲んでいます。

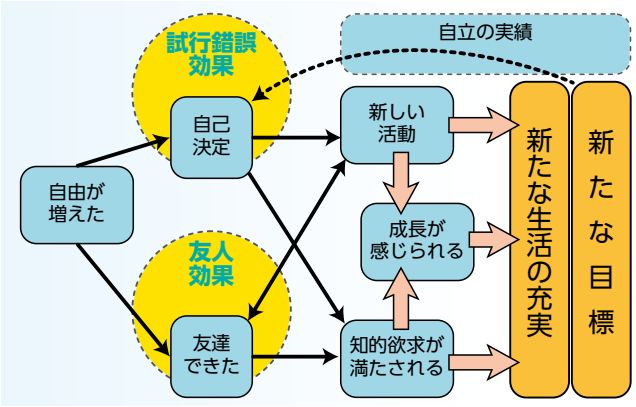

図 1「大学生活でよかったこと」について

もう一つは、「自由が増えた」→「友達できた」→「新しい活動」&「知的欲求が満たされる」の経路がありそうです。自由に自分で選択するということは、誰も自分のことを決めてくれない孤独もあるでしょう。しかし、友達ができれば、一緒にサークル活動を誘いあったり、互いに勉学に対する関心を高め合う等、安心して挑戦することもありそうです。図では「試行錯誤の効果」と同様、「友人効果」として描いています。

そして、この二つの経路の結果は、自分が高校生の頃に比べて「成長が感じられる」→「新たな生活の充実」から「新たな目標」へ転化するようにもみえます。成長の喜びがさらなる成長を生むということはいかにもありそうなことです。入学後の半年間を自己判断で活動してみた後の充実と喜びという成果は、点線で囲んでいる「自律の実績」となり、一枚分厚い人間に育つことで、再び次の機会の「自己決定」を強めることになるのではないでしょうか。

このように、新入生の成長モデルができました。半年くらいの間に試行錯誤経路か、友人経路かあるいはその両方を活用できると、大学生活の充実度が高まり、成長の近道になるのかも知れませんし、反対に、なにかの理由で試行錯誤をしにくいとか、友達を作りにくいというような環境があると自分を成長させる上では不利になるかも知れませんね。

さて、私自身は現在学生支援には関わっていないので、こういう種類の調査をしてもあまり使い道はないのですが、こんな調査を実際のカウンセラーの仕事や教育に生かせると楽しいなと思います。

なお、このミニ研究はもう少し興味深いことが一つ二つ出てきそうです。それはまた別の機会にお見せできればとおもいます。

新任教員自己紹介

講　師　**水島　梨紗**
（英語英米文学科）

平成25年４月より、英語英米文学科において英語コミュニケーション分野の科目を担当しています。今年度は初めて新入生の担任を受け持ち、自身も新鮮な気持ちで授業に臨んでいます。

講義では、学生自らが問題について考え、意見を発信していくための方策を伝えることを重視しています。受講生たちも、様々な情報にアクセスしながらディスカッションやプレゼンテーションに意欲的に取り組んでおり、学期開始当初と比べて、様々な視点から物事を捉える力や、自身の考えを明確に伝える力に成長の跡が見られています。

今後も、学生とのコミュニケーションを大切にしながら、授業内外で英語や異文化についての理解を高めるための様々な取り組みを続けていきたいと考えています。

講　師　**佐藤　ケイト**
（外国人教師）

大学へ進学するつもりはありませんでしたが、イギリス軍入隊試験に合格した時に軍から大学へ進学するように命じられました。とりあえず大学に入ったは良いものの、何を勉強しようかと考えていました。最初は心理学を専攻しましたが、１年目にフランス語に変更。高校ではフランス語を勉強した事が無く、軍の訓練では泥の中を走り回り、雨の中眠り、週末はライフル射撃をしたりして、勉強と訓練の両立は困難でしたが楽しかった事を覚えています。その後、日本にやってきました。人生はどこへ行って何をしたら良いのかわからない時もありますが、何をするにしても楽しみながらベストを尽くす事をモットーにしています。

特別任用
教　授　**釣　晴彦**
（英語英米文学科）

教職課程を履修している学生を主に講義を担当しています。学校現場では私は高校生を相手に過ごし、また管理職も経験しました。札幌学院大学で教えるようになってから、小学校、中学校との関わりも多くなりました。まさにキャリア教育という視点に立って子ども達の成長を見ていると、教育の役割と社会の期待度が如何に大きいのかが分かります。教育実習や教員として採用されて学校現場に出て行く学生をどのように支援していくかが今の私の大きな役割だと考えています。

講　師　**M.J.Cotter**
（外国人教師）

13年ほど前は、ただのスポーツバカなニュージーランドの小学校教員でした。クラスには、英語を全く話せない他の国の生徒もいました。正直、その生徒に教えるのは大変でした。しかし本人にとっては、もっと大変で辛いことだったと思い、そのときに私は決心しました。良い教師になるためには同じ経験が必要だと思い、日本語が全くわからない状態で、北海道に来ました。

色々なハプニングもありましたし、今になって思い出すと笑い話になりますが、自分は「やってみる！」と言う気持ちが本当に大事なことなんだと、わかってきました。まさか、ニュージーランドにいる時には日本語を話せるようになり、修士を取得し、大学の教員になるということは考えてもみませんでしたよ！みんなさんも本当にやりたいならできますよ！夢は叶いますよ！“The sky is the limit....dream in English!!”

近況報告 人間科学科

http://jinbunweb.sgu.ac.jp/ningen/

人間科学科では学生個々の関心に沿ってさまざまな科目や実習・演習が用意されています。ここでは2013年度の１年生から４年生までの主なトピックスと、課外活動について紹介します。

１年生：人間科学基礎ゼミナール

2013年４月 に114名 の新入生が入学しました。宿泊オリエンテーションは定山渓温泉に移動して行われ、昼のガイダンスとは一転して、夜はゲーム大会でおおいに盛り上がりました。

１年生は人間科学基礎ゼミナールという科目がクラス機能を有し、少人数で大学生としてのスタディスキルを身につけると同時にさまざまなテーマについて学びます。12月には全体発表会を行いました。体罰やいじめ問題、生活保護制度、沖縄の農業問題などテーマも多様でした。

２・３年生：各種実習

①考古学実習

８月に置戸町勝山地区で考古学実習（現地実習）を行いました。野外調査法の学習を目的に、実際に旧石器時代の遺跡での発掘調査や測量調査を行うものです。鶴丸学長みずから発掘指導を行いました。本学科は置戸町と協定を結んでおり、考古学実習をはじめフィールドワークの現地調査などで連携しています。

②フィールドワーク

置戸町で取り組まれている「オケクラフト」という地域づくりについて学ぶため、10月に現地調査に出かけました。現地では置戸町関係者やオケクラフトセンターの職員からのレクチャーや、工房でのインタビュー、バターナイフづくり、現地報告会を行いました。

③社会福祉実習

８月中旬から９月中旬にかけて、35名の学生が社会福祉実習を行いました。24日間にわたり、児童領域、高齢領域、障害領域、医療領域の福祉現場に配属され、利用者や職員との濃密なかかわりをもちました。写真は12月の実習報告会の集合写真です。

４年生：卒業論文発表会

2013年度の卒業論文発表会は２月に開催されます。卒業までの最後のハードルです。写真は2012年度の社会・福祉領域のポスター発表の様子です。

課外活動

SGU 遊ベンチャー

本学学生および教職員ボランティアが運営する体験教室（大学地域連携活動）では、地域の子どもたちを対象に、年に４回ほどさまざまなイベントを行っています。５月には運動会を開催しました。

いのちのパネル展

人間科学科４年生の山口紗季さんは交通事故被害者遺族のひとりとして、７月に啓発活動「いのちのパネル展」（北海道交通事故被害者の会主催）を学内開催しました。

近況報告 英語英米文学科

http://jinbunweb.sgu.ac.jp/~eigoeibei/

英語英米文学科には「高度な英語運用力の養成」「複数の専門領域の体系的な修学」「人間性と人間文化への豊かな理解の醸成」「国際化される地域社会に貢献する人材の養成」という目的があります。以下はそういう目的の英米で学び、半期留学で英語運用能力と人間性を高めている学生、ゼミで専門領域を学びつつ切磋琢磨している学生、そしてこれから地域社会に貢献していく学生の声を紹介します。

①半期留学

アメリカへの留学を通して学んだことはたくさんありますが、中でも強く実感させられたのは、お互いのことを理解しようとする前のめりの気持ちの重要さです。母国語が異なる私たちはそれぞれの言いたいことを完璧に英語で伝え合うことができません。しかし相手の考えていること・伝えようとしていることをいかに汲み取ろうと積極的になれるかが大切なのだと感じました。

日本を離れてから、どれほど母国のことを知らないか再認識させられたのと同時に、日本人としての誇りを持つようになりました。多くの人々にとって深く関わる日本人は私が初めてとなるので、尚更そのことを意識して生活しています。

ここで得たことを忘れず、全ての機会を逃さぬよう様々なことに挑戦し、それを吸収していきたいです。

（２年　熊谷　紗季）

②専門ゼミ

私たちは眞田敬介先生のゼミで日々勉学に励んでいます。「英語と日本語の表現･発想の違い」というテーマで、教科書を使いながら知識を深めています、と言おうと思いましたが、それだけではただの授業と変わりません。ゼミには「少人数制で、自由な発想で、他人とぶつかり合える」という特徴があります。私は「ゼミは全員で一緒に知識を深めていくもの」だと考えています。ゼミでは学生と先生が対等で、一緒に答えを探すのです。そのため「学生が先生の意見に反発する」ことができます。現に私たちゼミ生は、今までゼミ中に先生が用意した意見に幾度も反論し、先生自身の論文の材料になるほどの意見を出したことがあります。

このようにゼミは、普通の授業とは少し変わったものです。きっと、刺激を与えてくれると思います。もちろん勉強だけではありません。ゼミ内での飲み会や、他ゼミとの交流会、研修で海外に行けたりもするかも？そういうことも期待しながら、ゼミについてしっかり考えることをお勧めします！

（３年　須田　航平）

③就職―今の私があるのは経験と人との出会い―

今の私があるのは、アメリカ短期留学、インターンシップ、就職活動などそれぞれの経験を通じて得た学びとその経験の中で出会った人々のおかげです。

アメリカ短期留学では３つの学びにより私は変わりました。１つ目は分からない事はすぐ調べるようになった事。２つ目は目標が決まったら「即行動・即実行」するようになった事。３つ目は自分の意見をためらわずに言えるようになった事。これらの学びがその後のインターンシップ、就職活動にも生かされ、良い結果を残す事ができました。

インターンシップ先のホテルは、就職活動でホテル業界を志望するきっかけを与えてくれました。就職活動では、諦めずに努力し続ける事で結果がついてくる事やたくさんの会社、人々の話を聞く事で自分の視野と選択が広がる事も学ぶ事ができました。

その結果、志望していたホテル業界を含め５社から内定を頂けました。今の私があるのは、これらの経験で得た学びと経験の中で出会った人々のおかげです。この大学に来て本当によかったと思っています。

（４年　中島　花梨）

いかがでしたでしょうか。学科のブログ「英語英米文学科 NOW」では、より頻繁に近況や学生の様子をお伝えしています。ぜひご覧ください。

さて、本学科は2014年度から、新カリキュラムを実施します。実用英語はもちろん、複数ある専門分野を更に体系的に提示します。「学問」だけでなく「実用」も重視し、「就活」へとつながるカリキュラムです。どうぞご期待下さい。

近況報告 臨床心理学科

http://jinbunweb.sgu.ac.jp/~rinshoshinri/

希望に向かっての入学、そして大学生活への適応

人文学部では、入学して間もなく、合宿オリエンテーションを行っています。臨床心理学科の学生も参加し、これから４年間共に学ぶ仲間と濃厚な時間を過ごします。出発前の学生たちは、やや緊張し不安な面持ちの者もいますが、上級生のサポートやさまざまなプログラムも工夫されており、短時間で打ち解けた雰囲気へと変わっていきます。合宿オリエンテーションでは、学部全体で過ごす時間もありますが、多くは学科を４つに分けたクラス単位で過ごすことになります。クラスメンバーとの交流も大切な目的の一つです。また、講義の履修相談やサークルの説明などの機会も作られており、さまざまな角度から大学生活への適応をサポートしております。実際に、参加者の感想としても、友達をつくるよい機会であったという声がたくさん寄せられています。

また、臨床心理学科では、入学からの半年間、基礎ゼミナールという授業が用意されています。１年生は全員必修で、合宿オリエンテーションのときと同じ４つのクラスに分かれて４人の担任の下で、それぞれ毎週顔を合わせることになります。基礎ゼミでは、まずクラスメートとの関係性を作ったり、心理学的なワークを体験したりします。また、ハラスメントに関する学びや対処法など大学生活に必要な情報を得る場ともなっています。さらに、６月に実施される体育大会についての話し合いや準備もクラス単位で行います。クラス対抗の種目もあり、クラスの連帯感は強まって行きます。基礎ゼミでいっしょになった人とその後も長く支え合う関係ができることが多いこともあって、上級生たちも基礎ゼミはとても大切なカリキュラムであると実感しています。

このように、入学から半年間は、特に手厚く大学生活に慣れるための工夫が施されています。そして、学生たちは、次第に大学生らしい顔つきになって大学生活に順応していきます。ここをスムーズに通りすぎることができると、一人一人の学生が自分自身の興味関心を大切にそれぞれの学びを求めて、大学の中のさまざまな資源を活用し始めることは難しくないようです。

2013年度臨床心理学科３組体育大会にて（玉入競技：優勝）
先輩たちも駆けつけました

座学だけではない学びの機会

臨床心理学科は、「臨床」という言葉を学科名に付けていることからも分かるように、座学だけではなく体験型の学びを大切にしており、カリキュラムにも取り入れています。ここでは、３ ～ ４年生対象の応用実習Ｃを紹介します。応用実習Ｃは施設体験学習と位置付けられており、実際の現場で働く方々のお話を聞いたり、さまざまな臨床の現場に行き見学するといった内容です。

今年も養護施設や少年鑑別所などで働く方々にお越しいただきました。なかでも、今年度は、恒例の里親会会長の話しに加えて、里子自身の体験を聞く機会を持つことができました。今回お話下さった里子さんは、ちょうど３ ～ ４年生と同じ年頃の方でした。学生たちは、さまざまな人生があること、そして体験者から聞かなければ本当のところは分からないということなど貴重な学びをすることができました。

見学に行く施設としては、児童相談所、精神病院、重症心身障碍児施設、少年鑑別所、養護学校、精神保健福祉センターなどがあります。そこでは、施設概要や仕事内容の説明を聞き、許される範囲での見学があります。また、この授業に参加する学生たちは勉学への意識も高く事前学習にも取り組んでおり、たくさんの質問をして、現場の仕事を理解しようとする姿勢が見られます。そこには、ささやかな専門性への芽生えも感じられます。さらに、この体験が卒業後の進路を決める機会になる学生も少なくありません。それほど、心打たれ、心に残る体験となるようです。

進路について

臨床心理学科に入学してくる学生の多くは、入学時には「大学院に行って臨床心理士の資格を取得して、スクールカウンセラーとして働きたい」「病院・福祉施設等で対人援助職を目指したい」といった希望を持っています。

大学院の入学定員は10名ですので、他大学を含めて大学院に進学して臨床心理士を目指す人は毎年10名前後おります。大学院修了後は、病院、矯正関係、教育臨床の場で仕事をしながら臨床心理士の受験を目指すことになります。また、精神保健福祉士の養成コースを履修するものが20名程おり、福祉関連施設に就職しています。

そして、学生の多くは一般企業への就職を目指すことになります。一般企業に就職しても、対人スキルなど心理学で学んだことを活かして活躍しています。

このような学科の進路希望の特徴を踏まえ、キャリア支援課と学科教員とが連携して、学生の就職活動をサポートするようにしております。

学科としても独自の支援体制を整えるべく検討を重ねているところです。

近況報告　こども発達学科

こ発の森：http://jinbunweb.sgu.ac.jp/~child/

子どもの成長・発達について専門的に学びたい！教育現場で子どもたちに教え、彼らの学びを支援したい！と考える学生約200名が、日々、自分の知識と技術を磨き、成長しています。在学生の皆さんの2013年春からの様子を紹介します。

１年生：大学生活スタート！学習に、スポーツに、全力！

2013年春、大学生活へのまっすぐな期待にあふれる64名の新入生が入学。慣れない大学の講義やゼミへの戸惑いもあるのでしょうが、一人一人のモチベーションが高く、１年生クラスには早くも「学ぶ雰囲気」があります。１年次は、発達・教育に関わる講義のほか、外国語、論述・作文、コンピュータなどの基礎力を養う科目、そして、発達・教育の諸問題について調べ、発表や討論をする「子ども発達学基礎ゼミナール」を学びます。

多くの人が、基礎力を着実につけているようです。その成果は、基礎ゼミや講義レポートにも現れています。

一方で、スポーツや子どもと関わるサークルにも積極的に参加。人文学部一年生体育大会では、総合優勝と衣装・応援を讃える特別賞をダブルで手にする活躍ぶりです。

２年生：子どもと直にかかわる、視野を広げる。

２年次には、具体的な教育や発達支援の方法を学びはじめます。国語や理科など、教科ごとの授業の作り方を具体的な教材を手にしながら学んでいます。

子ども対象の行事をつくる実習では、「作って学ぼう！光の不思議と音のしくみ！」と題して、糸電話で音の伝わる仕組みやステンドグラス作りで光と色の性質を学ぶ体験行事を持ち前の団結力を生かして実施しました。参加した子どもたちのとても楽しそうな表情は行事成功の証！でしょう。

海外交流プログラムで、韓国の小学校の授業を参観するなど、積極的に見聞を広める学生もいます。

３年生：自ら理解を深める。文献を調べ、研究する。

３年次には、より実践的な教育や生徒指導の方法を学びます。国語教材の文章構造を理解するための切り貼りなど、教材研究の努力を真剣に実践しています。

専門的なテーマを自らたてて研究する力を養う「専門ゼミナール」では、発表とディスカッションで個々の読み解く力、話す力もアップしています。一方で、ゼミの結束力も高まります。ゼミメンバーの応援に支えられて保育士資格試験に合格した学生も（2014年度入学生からは、こども発達学科で保育士資格を取得することができるようになりました。）。

４年生：教職課程の仕上げと卒業研究、そして卒業へ。

前期は、模擬授業などを行う実践的な事前指導を受け、実習先の小学校で三週間の「教育実習」にのぞみました。実習先の先生方のご指導に支えていただきながら、子どもと向き合って授業をやり遂げた皆さん。一回りたくましくなって大学にもどってきました。その後の報告会では、４年生の実習体験談を真剣に聴きながら、１～３年生が先々自分が取り組む実習を思い描きました。

後期は、４年間の学修の集大成である卒業研究を仕上げる時期です。指導教員の研究室や図書館で突貫作業をする場面もありましたが、子どもの発達と教育を巡る多彩なテーマの研究報告書は力作ぞろいでした。

二大山場を乗り越え、暮れには後輩ゼミ生と一緒にX’mas ケーキを楽しむゼミも。明けて、卒業の年を迎え、いよいよ巣立ち（飛躍）の時期です。ときどき、古巣を訪れる小学校や児童館などで活躍する先輩たちの話しが在校生の皆さんの進路を照らしてくれています。

学科独自のホームページ“こ発の森”では、本学科に関するたくさんの事柄を発信していますので、ぜひご覧ください。

TOPICS

人文学部学生自治会　執行委員長
人間科学科2年　佐々木　勇太

2013年度人文学部合宿オリエンテーション

４月８日（月）から９日（火）にかけての２日間、定山渓にて合宿オリエンテーンが実施されました。このオリエンテーションは、毎年、大学生活の不安軽減や新入生同士の交流等を目的として行われています。オリエンテーションには教員だけでなく、２年生以上の学生実行委員や学生自治会等も協力して運営しています。

合宿１日目は、学科企画というものが行われました。昨年は講演会を行いましたが、今年は各学科に分かれて様々な企画を行いました。私が担当した人間科学科では、キャンパス内で今後利用する頻度が高いであろう場所を新入生に教えるという目的で、大学内探検を行いました。その後新入生はゼミごとにそれぞれの教室に行き、自己紹介やクイズなどのクラス別企画を行いました。クラス別企画の後に新入生はバスに乗ってホテルに向かいました。学科企画の時は緊張していた新入生も、夕食の時間には楽しそうに話している姿が多く見られました。夕食後は全学科合同の学部企画でクラス対抗のゲームを行いました。自分のゼミの人とだけでなく他のゼミの人とも交流している新入生も多くいました。

２日目は朝食後大学へ戻り、教員や先輩学生に履修登録や資格取得のための相談等ができる時間が設けられました。積極的に相談しようとする学生が多く見受けられました。

最後になりますが、この合宿オリエンテーションが新入生にとって、今後の大学生活を充実させる、良い思い出となればと思います。

2013年度人文学部スポーツ大会

６月15日（土）に第二キャンパスにおいて、人文学部１年生スポーツ大会が行われました。この行事は毎年行われるもので、人文学部全４学科の各ゼミ対抗で競い合うことで、ゼミ内の結束や他学科と交流をすることを目的としています。大会運営を行う実行委員は、各ゼミから選出された１年生が担当することになっており大会で行う種目決めなどを行います。私は人文学部学生自治会の代表として、この行事にオブザーバー的な立場で参加しました。大会準備は開催２か月前から行われ、宣伝用ポスター等の製作も行ないます。

当日は朝早くの集合にもかかわらず、どのゼミも優勝に向けて気合い十分に感じられました。今年はバレーボール・ドッジボール・リレーの３種目を行いました。各種目の審判は、１年生の各ゼミから選出された学生と有志で募集した２年生以上の学生が行いました。１年生の中には、クラスでおそろいのＴシャツを着ているゼミ、ボディーペイントやコスプレ等をして大会を大いに盛り上げていた学生が多くいました。大会は、最後までけが人が出ることなく終わり、去年以上の盛り上がりを見せたと感じました。この行事で得られた、ゼミの結束や他のゼミの学生との交流は、この先忘れることがない思い出の一つになっただろうと思います。

来年度の人文学部１年生スポーツ大会も大いに盛り上がり、１年生の良い思い出となってくれればと思います。

◆編集後記◆

今回は新任教員の紹介記事を前面に出しました。６名もの新任教員をお迎えした「人文学部 2013」の近況報告として相応しい内容と考えたためです。学科別近況報告や学生主導の行事報告とともに、今年度の人文学部の活発な近況が伝われば幸いです。原稿をお寄せ頂いた全ての方々に感謝致します。

今や各学科でウェブサイトとブログを持ち、随時更新している中で、年１回発行の「人文学部報」の目的をどう据えるかが、今後の課題かと思います。（眞田）